

大鹿スケッチ

第54号
2015年
4月
〈 発信者 〉
前志満 くみ
〈 提供 〉
旅舎 右馬允

青空の下で思わずうーんっと伸びをしたくなる季節がやってきた。一見、冬枯れていた山の木々の先っぽからまたエネルギーがあふれはじめている。新しい命とは言わない。冬の間もそれは彼らの中にすでに備わっていたものなのだから。

「殴るときの拳の握り方は小指から握って中指は、小指から握って親指の人差し指、親指は添える第一関節のところまで人差し指と重ねたはずだ。指と中指を軽く押さえる感じにします」

農村における 身体 役割

物理的な目標地点への到達なのか、ともかく共通しているのはツールとしての「身体」に興味があることだ。

知人の格闘家がガイドしてくれた。こうやって握ると力が入る構造に我々の身体は出来ているらしい。ヨガはアシスタントの仕事で出かけた先で、担当するヨガく拉斯の前にボクササイズをやるというので興味本位で参加してみた。ガイドに従って意識的に拳を握ってみるとなるほど、納得の実感があった。試しに構えてみると、なんだか強くなった気分。どうしよう、誰でも倒せそう……。その拳でジャブ、ストレート、フック、アップパーなど様々なパンチのくり出し方を教えてもらっている、ふっと母親に扇子の持ち方が汚いと注意された事を思い出した。確か、扇子の正しい持ち

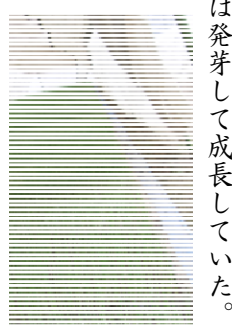
大鹿村の春はとにかく祭り。四月中旬に行われる大西公園の桜祭りをかきわきりに五月三日の大鹿歌舞伎春の定期公演がフィナーレのような感じで、村を挙げての大祭りにまで様々な祭りが行われる。巡ってきた季節を慈しむ、農作業モードに入る前のひと時を大鹿谷全体で楽しむかのようだ。祭りに欠かせないのは、芸能だ。大鹿村の代名詞のようには言われる「大鹿歌舞伎」は今となっては観光的な要素が強いが、そもそもは奉納の一環であった。大

鹿谷で行われている祭りに見に行けば村人の気質が分かるはずだ。歌舞伎に聞かず実芸が好きな人が多い。祭りの前座や、神事が終わると、和太鼓やフラメンコ、アフリカン太鼓にアフリカダンス、ヨサコイソーラン、カラオケ、日本舞踊、インドの古典楽器シタールの演奏など祭りの趣旨を忘れるぐらいのステージが入れ替わり立ち替わり繰り広げられる。どこでもやっていることも知れないが、人口比率的に考えるとこのバリエーションの豊富さは他の地域には見られないのではないだろうか。この谷の人達とはかく「身体」をつかって表現するのに一生懸命だ。

そんな「身体」の使い手として村内でデビューを果たす機会を得た。大鹿村の春の大祭りの一つ「信濃宮(※)の「李花の祭り」で「李花の舞」を奉納させていただくことになったのだ。平成元年に母が振付、数年は彼女が舞っていたが家業が繁忙期と重なるため後継者に譲っていたものが巡り巡って今年、私の番となったのだ。信濃宮の祭神の宗良親王(むねながしんのう)は南北朝の時代に現在の鹿谷村を拠点として戦っていた南朝方の一人で、和歌の神様になつちやうくらい和歌が大好きだった人だ。本当は戦わず、好きな和歌だけ追求したかったようだけれど、各地の戦場に赴いている。

自分自身の欲求はあるけどお国のため、お家のために戦わざるを得ない状況に立たされていたことを想像すると、いつの時代も変わらないなと思った。「李花の歌」の中にある宗良親王像は意外と共感が持てる人物だった。稽古は振付・演者でもあった母親につけてもらったが意外と新鮮だった。「ここはもっと柔らかい表情で踊らないとダメ。いつもリニアのことでぎゃーぎゃー言っているから口角が下がるのよ!」山に行くと植物見ると、山を眺めてる時の気持ちを使いなさい。心は上流で身体は下流だと思った。母親は良くも悪くもよって見ている。たった五分という時間だけど気持ち(意識)はいろいろな所に自由に飛ばせるものだと改めて感じた。ここ数週間稽古期間だった。四月二十九日「李花の舞」を奉納した後、一人の村民がつかつかと駆け寄ってきて「よかったです。お母さんの舞の境地に尋ねると「これは仕事だもんぞーだ。楽しみにしてるとで」でやってもらってとちやう、しようがない!」と勝気。すが芸能の村。しばらくの間、この舞とじっくり向き合ってみることにしよう。

一月中旬から四月の初旬にわたり、ヨガの研修に東京に出かけていた。ヨガの勉強をする前に指導を始めてしまったので昨年からの学びがとても充実している。今期は主にティーチングの学びだったはずなのだが自分自身のトレーニンングが面白くなってしまい、結局、指導については二ノツギで三月などは東京在住しながら、特定の指導者にへばりついてみた。ティーチングの講義のなかで「経験したことしか教えられない」という言葉が印象に残っている。何が身体なのかでおきているのか、また意識的に行っているのかを状況中継できることが「人に伝える」ということのベースになるのだろう。アルピニストの植村直己さんは「経験は技術」だといっている。奇しくも同時期に熱中している登山とヨガであるが、山で生き残る術もヨガの指導者として責任を持って生徒の前に立つことも同じことなんだ、と噛みしめる今年の冬の学びであった。改めて体に向き合うというんな情報があるものだとおもった。何れはなくなる「身体」だからこそ、いろいろ動かして、感じて、使って、生かしていこうと思う。



大鹿 HeatBeat ～大鹿の人々～ 第52回 紙谷 正 さん (88)

季節ごとの風景と共に大鹿人の生活を紹介します。淡々とした日々の中に熱く響く「鼓動」をお届けします。

一月中旬から四月の初旬にわたり、ヨガの研修に東京に出かけていた。ヨガの勉強をする前に指導を始めてしまったので昨年からの学びがとても充実している。今期は主にティーチングの学びだったはずなのだが自分自身のトレーニンングが面白くなってしまい、結局、指導については二ノツギで三月などは東京在住しながら、特定の指導者にへばりついてみた。ティーチングの講義のなかで「経験したことしか教えられない」という言葉が印象に残っている。何が身体なのかでおきているのか、また意識的に行っているのかを状況中継できることが「人に伝える」ということのベースになるのだろう。アルピニストの植村直己さんは「経験は技術」だといっている。奇しくも同時期に熱中している登山とヨガであるが、山で生き残る術もヨガの指導者として責任を持って生徒の前に立つことも同じことなんだ、と噛みしめる今年の冬の学びであった。改めて体に向き合うというんな情報があるものだとおもった。何れはなくなる「身体」だからこそ、いろいろ動かして、感じて、使って、生かしていこうと思う。